

アイデンティティの本質をめぐる研究の動向と課題

—性同一性障害の性別移行を観点として—

目白大学大学院心理学研究科 西野 明樹
目白大学人間学部 沢崎 達夫

【要 約】

アイデンティティは、今や心理学研究の主要な概念の1つにまで発展している。しかし提唱者であるErikson自身が指摘しているように、アイデンティティの本質の意味を捉える研究は多くない。そこで本研究では、アイデンティティ概念の時代的変遷を辿りながら、Erikson以降のアイデンティティ研究の成果と課題について論考を試みた。その結果、“これが私だ”という生き活きとした現実感をもたらすアイデンティティの3要素（自己アイデンティティ、心理社会的アイデンティティ、自我アイデンティティの感覚）のうち、自我アイデンティティの感覚について十分に検討されていないことがわかった。しかし一方で、病や困難に直面した人の社会適応に関する研究報告には、自我アイデンティティ感覚の獲得過程と捉え得る知見があった。このことから、心理社会的危機に直面しつつアイデンティティ再獲得のために闘う人々の中から、より本質的なアイデンティティ（Erikson, 1968）を抽出し得ることが再認された。最後にこれらの研究動向を踏まえ、今後のアイデンティティ研究に示唆を与える現象として性同一性障害に見られる性別移行を取り上げ、彼らに着目する意義と直近の研究課題に言及した。

キーワード：E. Erikson, アイデンティティ, 性同一性障害, 性別移行

1. 問題と目的

心理学研究において、アイデンティティ (identity) は多くの研究者の関心を集める主要な概念の1つに数えられる。アイデンティティは古代ギリシア時代から哲学的に検討されてきた概念であるが、心理学研究の中で用いられるそのほとんどは、Eriksonによるアイデンティティ理論を指す (梶田, 1998)。

Eriksonのアイデンティティ論が注目されるようになった1950年代、アメリカでは、既存の社会的枠組みでは捉え切れない、青年達の問題行動が社会問題となっていた (村澤, 2005)。このような時代背景の下でErikson (1950 仁科訳 1977-1980) は、青年達の見せる社会への反発を、彼らが社会との距離をつかんでいく葛藤プロセスと捉えた。そして、“これが私だ”と

いう生き活きとした現実感 (a vitalizing sense of reality) を得る為に必要なものとして、「自己アイデンティティ (self identity)」と「心理社会的アイデンティティ (psychosocial identity)」の相乗関係によってもたらされる「自我アイデンティティの感覚 (a sense of ego identity)」を取り上げた。その後、Eriksonのアイデンティティ理論は、一見反社会的に感じられる青年達の問題行動の背景にある、所属感を渴望する苦悩をよりよく理解することを助ける見解として、青年心理学の発展にも大きく貢献した (村澤, 2005)。

またErikson (1950 仁科訳 1977-1980) は、人間の健康な発達には、乳児期から成熟期までの8つの各段階に特有な心理社会的危機を通して漸成的 (epigenetic) に展開されるもので

あると考えた。この漸成的発達の中で、アイデンティティは、第5期（青年期：12歳-18歳頃）に得られる各段階の漸成的な統合とされている。青年期に特有の心理社会的危機は、それまでの時期に頼ってきた不変性（sameness）と連続性（continuity）のすべてが、身体の急激な成長や生殖器の成熟等によって揺さぶられることである。

このような危機への直面は、青年期までに確立されずにいた葛藤を顕在化させ、自己の社会的役割に関する新しい葛藤をも引き起こし得る。しかし新たなアイデンティティの獲得は、“内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力が他者に対する自己の意味の不変性と連続性との合致する経験から生まれた自信（self-esteem）（Erikson, 1959 小此木 訳編 1973）”をもたらす。そしてその自信は、“たしか未来に向かっての有効な歩みを今自分は学びつつあるという確信…つまり、自分が理解している社会的現実にはっきりと位置づけられるようなパーソナリティを自分は発達させつつあるという確信（Erikson, 1959 小此木 訳編 1973）”に成長し、活き活きとした現実感を引き出すものとなる。

そこで本研究では、人々のwell-beingに示唆を与え得るものとしてEriksonのアイデンティティ論に着目し、先行研究の中に見られるアイデンティティ概念の時代的変遷を、(a) 自己アイデンティティ、(b) 心理社会的アイデンティティ、(c) 自我アイデンティティの感覚という3点から概観する。これらによってアイデンティティ研究の現状をまとめ、人々のwell-beingに資する今後の研究課題を見出すことを本研究の目的とする。

2. 自己アイデンティティに関する研究動向

アイデンティティを初めて心理学的概念として体系的に提示したのは、Erikson（1950 仁科 訳 1977-1980）である。しかしEriksonは、自身の臨床的経験知や事例的検討等によってアイデンティティ概念を導き出した。初期のアイデンティティ研究に多大な影響と研究方法の指針を与えたのは、Marcia（1966）である。

アイデンティティ研究の始まり

Marcia（1966）は、アイデンティティ確立の達成度を測る方法として、アイデンティティ・ステータス法（identity status interview）を考案した。そしてこの手法は、アイデンティティを捉えることに成功した研究方法として、広く専門家に受け入れられた。アイデンティティ・ステータス法ではまず、半構造化面接を実施する。聴取内容は職業とイデオロギー（宗教、政治）の領域におけるアイデンティティの危機体験（crisis）及び社会的事柄への積極的関与（commitment）の有無である。その後、面接で得られた情報を下に、その人の各領域での心理社会的地位を（a）達成（achievement）、（b）モラトリアム（moratorium）、（c）早期完了（foreclosure）、（d）拡散（diffusion）の4類型で評定する。領域ごとの類型結果は比較検討され、それをもとに、その人の全体的な心理社会的地位が評定される（Marcia, 1966）。

しかし次第に、アイデンティティ・ステータス法を用いた研究の中で、Marcia（1966）の4類型のどれにもあてはまらない者の存在が見られるようになった。また、研究結果として得られた各類型に評定された者の割合は、その研究の対象集団自体が持つ、年齢や性別、職業等の属性に影響されるものとして考察された。その結果、研究対象者の属性や研究者の仮説や考察によって、当初の4類型はさらなる細分化を辿ることとなった。

女性解放運動と女性のアイデンティティ 初期のアイデンティティ研究のほとんどは、男性のみを対象としていた。アイデンティティ理論が男性を対象に見出されていったことはErikson自身も課題としてあげており、1964年には、女性のアイデンティティについて、内的空間（inner space）説を提唱している。この内的空間説においてErikson（1964）は、女性の肉体構造の中には、選びし男性の子を宿すべき内的空間（子宮）と子どもの世話をする生物・心理・倫理的コミットが隠されていることを前提事実として、女性のアイデンティティに言及した。また、その論述には、女性の知性に対する懐疑的な態度や、女性の外性器を傷跡あるいは穴とする表現など、男性優位な価値観からの強

い影響が垣間見られた。そのため内的空間説は、1970年代のアメリカ社会で大きな盛り上がりを見せた女性解放運動から強い批判を受けた。その後、Josselson (1973) が女子大学生を対象にアイデンティティ・ステータス法を行ったが、その視点も、男性優位な伝統的社会通念から強く影響を受けたものであった(鑑・山本・宮下, 1984)。

しかしJosselson (1973) の結果は、女性は職業等を通して社会的業績を勝ち得ることと、異性との親密性獲得、子どもの養育の間に葛藤を抱いていないことを示唆するものであった。この研究から示唆された親密性や子どもの養育についての観点は、「個人内領域 (intrapersonal domain)」に焦点化されつつあったアイデンティティ研究に、「対人関係領域 (interpersonal domain)」という新たな視点を持ち込むことに貢献することとなった(杉村, 1998)。

アイデンティティ・ステータスと性別 従来のアイデンティティ・ステータス法に親密性という対人関係領域の新たな基軸を加えたのが、Hodgson & Fisher (1979) である。その結果からHodgson & Fisher (1979) は、大学生では性別によってアイデンティティ・ステータスの主要領域が異なることを指摘した。続いて、大学生男女の性差を検討する研究によって、青年期女性のアイデンティティは親密性を伴って形成される(Gilligan, 1982 岩男訳 1986) ことや、親密な他者との関係性の中で確立されること(Halpen, 1993) 等が示されていった。

これらの報告を受け、女性のアイデンティティを男性に依存するもの、あるいは、男性に対して未発達なものとする見解は徐々に下火となっていった。しかし一方で、アイデンティティ・ステータス法の中で取り上げられる対人関係の視点は、従来の評定領域であった個人領域の基軸(職業、宗教、政治)に、対人関係領域の基軸(親密性)を新たに加えたものに過ぎなかった。評定領域ごとに心理社会的地位を評定する手法自体は改良されておらず、各類型に評定される人数の割合等が男女間で比較検討された。こうして見出されていったアイデンティティ・ステータスの性差は、性別と主要な領域を対応させる考えをもたらした。そして、男性に

にとって重要なのは「個人内領域」であり女性にとって重要なのが「対人関係領域」であるという二分的な理解は、研究上の一種の前提としてまで認知されていった(杉村, 1998)。

自己アイデンティティ研究の限界と課題

以上に述べてきた自己アイデンティティに関する研究は、ほとんどが大学生を対象にアイデンティティ・ステータス法を実施している。このことには、Eriksonが明示していた漸成的発達の考えが影響していると考えられる。大学生の時期は、“アイデンティティ確立”を解決すべき課題(発達主題)とする、第5期(青年期)にあたる。つまり、大学生を対象とした研究知見は、青年期に見られるアイデンティティの確立に焦点づけられたものであったと理解される。

しかし、アイデンティティは、その確立が青年期の発達主題であると同時に、その形成プロセスは生涯にわたって続くものである(Erikson, 1959 小此木訳編 1973)。また、アイデンティティ・ステータス法によって評定されるのは、ある調査実施時点での心理社会的地位に過ぎない。したがって、これらのアイデンティティ・ステータス法を用いた自己アイデンティティ研究は、生涯にわたる動的なものとされているアイデンティティのもうひとつの側面を十分に捉えていないと言える(Whitbourne, 1986)。現在では、アイデンティティ・ステータス法自体の方法論の限界や課題を明快に指摘する、谷(2001)の報告などもある。

プロセス性のある発達主題へ アイデンティティを生涯発達における動的プロセスとして捉える研究は、中年期の危機を対象にした研究から始まった。先駆けとなった研究の1つが、Whitbourne (1986) による“アイデンティティ維持プロセス”理論である。Whitbourne (1986) は中年期以降に人々が経験する身体面及び認知面での能力低下をアイデンティティの危機と捉え、危機による揺さぶりを適切に処理するために用いられる3要素を挙げた。その3要素とは、(a) 新しい変化をそれまでのアイデンティティで理解しようとする同化(identity assimilation)、(b) アイデンティティを変化さ

せて新しい環境への適応を試みる調整 (identity accommodation), (c) 同化と調節を交互に使いながら環境とアイデンティティのバランスを保つ均衡化 (identity balance) である。

Whitbourne (1986) の提案が画期的であった第一の点は、アイデンティティが危機に陥る契機を、青年期以外にもそのまま適用できるように再定義したことと言える。青年期アイデンティティの確立において、その不変性と連続性は、身体的成長や第二次性徴等を契機に揺さぶられるものとされてきた。Whitbourne (1986) はその契機を“それまでとは異なる自分への直面”として捉えたのである。これによって、アイデンティティ概念を青年期以外の発達理解に応用することが容易になった。

第二の点は、アイデンティティ発達の要素に環境への適応維持を盛り込み、社会との適合性という観点を加えたことである。個と社会との相互作用を実証的研究の中で捉えることは難しく、心理社会的アイデンティティの観点を加味した研究報告は多くなかった。“アイデンティティ維持プロセス”理論は、この2点によって、アイデンティティを動的に捉えるその後の研究に大きな影響を与えたと考えられる。

Whitbourne (1986) 以後、アイデンティティの危機を自らの身体的変化に直面することとして捉える、中年期以降のアイデンティティ研究が盛んになった。例えば青年期以降もアイデンティティの危機を契機としたアイデンティティ確立が達成され得ることを見出した岡本 (1986) は、“アイデンティティのラセン式発達モデル”を後に提示している。

アイデンティティ研究における性差の低減 アイデンティティ研究の関心が青年期以外の発達期にも向けられていく中、社会的価値観は刻々と変化し、アイデンティティ研究もその影響を受けた。アイデンティティ研究への影響が特に顕著だったのは、伝統的性役割価値観が薄れたことによる、社会的役割における性差の狭まりである。危機の定義に第二次性徴が含まれていなかった中年期アイデンティティ研究ではすでに性差の比重は小さいことが指摘されていたが、次第に、青年期アイデンティティ研究でも

性差を支持しない見解が見られるようになった (Puikkinen & Kokko, 2000)。我が国の大学生を対象に質問紙調査を行い、「個としての自己」と「関係の中にある自己」の観点からその性差を検討した山岸 (1991) も、性差を支持しない領域の存在を明らかにしている。

研究結果として実証的に示された性差の低減は、性別によって異なるアイデンティティ発達図式を想定していた研究者に二分的理解の再考を促し、社会的文脈を考慮してアイデンティティ発達を捉えることの必要性を喚起させた。さらにより新しい研究では、葛藤への気付きの重要性や適切な他者の必要性等、青年期と中年期のアイデンティティ発達に多くの共通点が見出されている。そして、性別や年齢、職業等の各個の特徴的属性を、各個に固有なアイデンティティを解釈する際に考慮すべき背景文脈とする考えは、青年期アイデンティティ研究に再取り込みされるまでになっている (清水, 2008)。

3. 心理社会的アイデンティティに

関する研究動向

アイデンティティ研究におけるパラダイム転換

Erikson は、“私は私である”という個人領域におけるアイデンティティの確信が所属する共同体のなかで承認され、十分に機能していることを確認していく作業の中に、アイデンティティを見出した。アイデンティティは、“個人の核心 (the core of individual) と彼の共同体文化の核心 (the core of communal culture) に共通するアイデンティティを実際に確証する過程”と説明される (Erikson, 1968 岩瀬訳 1973)。これが自我アイデンティティの感覚を得るために必要なもう1つのアイデンティティ、つまり、所属する集団や社会との相互作用を含む、心理社会的アイデンティティである。

これまでのアイデンティティ研究の多くは、内的な自己アイデンティティを取り上げていた。そのため、本来のアイデンティティ概念が持つ、個と社会との相互作用 (谷, 2002) や、「同一」と「差異」の中で同定確認 (identify) しようとする主体の自発的行為 (溝上, 2002) は、十分に考慮されてこなかった。

「関係性」への着目

心理社会的アイデンティティに着目する動きはここ数十年に顕著であるが、その兆しは、1980年代にすでに見られ始めていた。それが、アイデンティティを「関係性」の視点から捉える研究である。アイデンティティに「関係性」の視点を取り入れた研究の創成期を代表する見解として、Frantz & White (1985) による“発達の複線モデル (two-path model)”がよく挙げられている。ここでの経路は、「個体化の経路 (individuation pathway)」と「愛着の経路 (attachment pathway)」の2つで、同等の価値を持ちながら相互に促進し合う、不可分なものとされている。

このモデルは、Erikson (1950 仁科訳 1977, 1980) によって提案された8つの発達段階すべてに適用される点でも、青年期のアイデンティティ確立に焦点付けられてきた従来のアイデンティティ研究と一線を画すものと考えられる。アイデンティティを「個」と「関係性」の2軸で捉える研究には、他にも、岡本 (1997) などがあり、宗田・岡本 (2005) は、「個」のアイデンティティと「関係性」のアイデンティティ、それぞれの尺度を作成している。

また、これとは若干異なる視点で「関係性」を捉える研究もある。Archer (1993) や Josselson (1994) は、アイデンティティを複合的かつ動的に変化するものと捉え、アイデンティティそのものが他者との相互関係の間で発達するという見解を示した。本邦では杉村 (1998) が同様の視点から、アイデンティティ形成を以下のように定義している。アイデンティティ形成とは、“自己の視点に気付き、他者の視点を内在化しながら、そこで生じた自己と他者の視点との間の食い違いを相互調整によって解決する作業”である。杉村 (1998) の定義には、主体と他者の双方の行為とその相互作用が含まれており、アイデンティティの心理社会的側面をよりよく捉えるものと考えられる。

「関係性」に着目した研究の限界と課題

アイデンティティ研究の中に「関係性」の視点が盛り込まれることで、アイデンティティを動的なものとして取り扱う研究が報告されるよ

うになった。その流れの中で、“男性は個人内領域、女性は対人関係領域”という、二分的なアイデンティティの理解についても、再考されつつある。しかし、「関係性」に着目した研究のほとんどが女性のみを対象に行われていることは、特筆に値する (例えば、清水 (2001)、杉村 (1998))。男女の性別を研究対象者の統制条件とすることは、アイデンティティをより精緻に定義し、実証的な研究成果を得るための手続きとして理解される。しかし、男性を対象にした研究や男女を比較検討する報告が少ないために、「関係性」の視点が盛り込まれたアイデンティティは女性のみを説明するものではないかという批判には耐え難い。これは、「関係性」に着目したこれまでのアイデンティティ研究から示唆される大きな課題と言える。

また、研究の中で取り上げられている「関係性」が、母子の愛着関係や身近な他者等のより密接な他者との間にある関係性を指すことにも留意を要する。Erikson (1968 岩瀬訳 1973) によれば、心理社会的アイデンティティの獲得には、自らが所属している共同体の中で“価値ある者”からの是認が不可欠なものとなる。各個は価値ある者からの是認を共同体からの是認として受け取り、その共同体への帰属感を抱く。こうして、社会的現実の中に自らが位置づけられていることへの確信が、生き活きとした現実感をもたらす (溝上, 2002)。したがって、心理社会的アイデンティティを捉えるためには、共同体の中で価値ある者からの是認や共同体への帰属感も考慮に入れなければならないだろう。

4. 自我アイデンティティの感覚を

捉えるための試み

Erikson は、過去20年間の論文をまとめた『identity: Youth and Crisis (1968)』において、多分野・他領域への汎用化によってアイデンティティ概念の本質が見失われ始めていることに強い警鐘を鳴らしている。それは、アイデンティティが“私とは誰か”という問いと同一視されていることへの苛立ちとして表現されている。より本質的なアイデンティティとは、お互いを否定し合っていた選択力のある二者 (ある

いは集団)がお互いを連結させ活性化させ合うことによって生じる内的解放を伴う現象である。例えば、人種的差別によって文化を剥奪されたアフリカ系アメリカ人が、驚くべき威厳と不屈の精神を持って黒人として自己確信を持ち、かつまたアメリカ人としても統合される現象である。人はこのような内的・外的葛藤を乗り越え、危機を克服するたびに、熱意の伴う活き活きとしたエネルギーの増大を得る(Erikson, 1968 岩瀬訳 1973)。つまり、本質的アイデンティティとは、心理社会的危機への直面とそれにまつわる内的・外的葛藤を経て、社会的現実の中に自分の存在を主体的に位置づけていくことで得られるものと理解される。

アイデンティティ研究の手法上の

限界と新たな展開

Marcia (1966) から始まったアイデンティティ研究は、今も、Eriksonによって提案された臨床性の高い動的なアイデンティティをよりよく捉えようとする試みの中にある。研究者達は、様々な切り口からアイデンティティの操作的定義を設け、研究方法を試行錯誤してきた。これらの研究知見の積み重ねによって、より実証性の高い研究の中でアイデンティティが取り扱われるようになったと言える。しかし、現在のアイデンティティ研究においても、Erikson (1968 岩瀬訳 1973) の言う本質的アイデンティティは十分に捉えられていないように感じられる。

アイデンティティ概念の捉え難さ 研究上で自我アイデンティティの感覚を取り扱うことの難しさは、それが多義的・複合的な意味を含有することも一因と考えられる。しかし、このような概念的定義の難しさは、心理学研究上で扱われているその他の概念も同様に持つものと言える。よりアイデンティティ概念に特有の難しさについては、アイデンティティについて説明するErikson (1968 岩瀬訳 1973) の言葉が示唆に富む。

第一に、アイデンティティ形成の過程は“そのほとんどが無意識的な過程”である。Eriksonによれば、人が最も強くアイデンティティを意識するのは、人生の危機的時期にまさに入ろう

としているとき(アイデンティティの混乱に突入しつつあることに気付くとき)である。突入後のアイデンティティ形成の過渡期には、巨大な課題を目の前に、選択と意思決定を迫られているように感じられる。その切迫した緊張感がアイデンティティの形成過程であったことは、その体験を越えてしばらく経った後に気付かれる。そして、活き活きとした現実感を伴う最善のアイデンティティの感覚は、心理社会的な安寧として体験される。つまり、アイデンティティに意識を向ける必要もない程、極めて安定した状態に至るのである。このような無意識的な過程を研究上で取り上げることは、難しいと言わざるを得ない。

第二に、アイデンティティは現実的社会の中で自己の存在という“錨をおろす”ものである。個人の人生におけるアイデンティティの危機と多世代にわたる歴史的発達とは、切り離すことができない。同様に、個人の人格的成長と共同体の変化とを切り離すこともできない。心理的なもの(個人)と社会的なもの(共同体)は、互いに他方を定義し合う相互関連的なものである。これらの相互作用によって元型としての重要性を持つものが、アイデンティティと言える。しかし、変化や相互作用性を概念定義に包含することは容易ではない。

本質的アイデンティティを捉えるための研究方法 Eriksonによるこれらの指摘を鑑みると、本質的アイデンティティについて知見を得るために、2つの方法が考え出される。1つは、アイデンティティについて十分に理解する者が、アイデンティティの形成過程にある者の主観的体験を、丹念かつ綿密に洞察し解釈する方法である。もう1つは、心理社会的危機を経て本質的なアイデンティティの感覚を得た者から主観的体験を聴取する方法である。ただしこの場合、体験の聴取は、その体験からしばらくの期間を経た後に行われる必要がある。

前者の方法は、Eriksonの言う“洗練された精神分析学”と同義である。しかし実施するためには、研究者の高い専門性が求められる。また、その専門性の評価基準の信頼性自体が新たな課題となるため、実現は極めて困難と言える。一方後者は、社会的文脈の視点をもって行

われた臨床性の高い心理学研究として理解される。従来の精神分析学の課題として、“環境”を内的現実としてのみ捉えてきたために個と環境との相互作用について捉える視点に欠けることを挙げた、Eriksonの指摘にも適う。研究としての実現性も、ある程度見込めるだろう。

5. 着目すべき新たな集団

Erikson (Erikson, 1968 岩瀬訳 1973) によれば、本質的なアイデンティティを知るためには、3つの特徴を合わせ持つ者(集団)への着目が有用である。それは、価値体系の矛盾によって避け難い心理社会的葛藤を抱いていること、健康的な活力を持っていること、自らの意志によって選んだものに深くコミットしそれに従っていることの3つである。

質的な臨床心理学研究の中に認められる

本質的なアイデンティティの獲得過程

これまで述べてきたように、アイデンティティ研究において、本質的なアイデンティティを捉える研究は、十分でない。しかし一方で、葛藤や人生の転機に差し当たった人々の社会適応・社会復帰プロセスに焦点をあてた質的な臨床心理学研究の中には、そのプロセスをアイデンティティに意味づけて考察するものが見られる(永田・岡本, 2005, 2008)。例えば、ボリビアから日本へ移住した日系労働者の文化的アイデンティティが日本への移住によって“日系人アイデンティティ”から“ボリビア人アイデンティティ”と変容していくプロセス(辻本, 1998)や、がん手術から社会復帰までに自分とがんとの関係を見定めて新たな自分へと変化していくプロセス(浅野・佐藤, 2003)が挙げられる。

性別移行とアイデンティティ また、特定集団に認められる特徴的な心理社会的困難に焦点を当て、その現象の中に見られるアイデンティティの形成過程を検討する研究も、わずかながら見られる。例えば西野(2008aなど)は、自らの身体的性別の特徴やそれに基づいて担うことが期待される社会的性役割に違和感を抱く当事者(現在の精神医学では、性同一性障害(gender identity disorder)と診断される者)の

性別移行を心理社会的葛藤の解決過程と考え、主観的な性別移行体験の過程を質的に検討している。そして、当事者のwell-beingを実現させる性別移行の特徴として、(a) 苦悩に耐えて生きていた性別移行前の自分と未来展望のある現在の自分との間に時間的一貫性・連続性が感じられていること、(b) 周囲の他者が持っている自らに対する性別の認識を身体的性別に即したもつから性自認に沿ったものに変化させる手段として、カミングアウトの積極的意義を認めていること、(c) 主体的な社会適応が再構築されていること、(d) 性別二元論では捉え切れない独自性のある自らのあり様に誇りが抱かれていること等を挙げている。これらは、Eriksonが指摘しているアイデンティティの特徴に酷似している。性同一性障害に見られる性別移行は、“これが私だ”という生き活きとした現実感の伴う本質的なアイデンティティの探求に有意義な示唆を与え得る1つの現象として、着目の価値がある(佐々木, 2011; 西野, 2012a, b)。

しかし、性同一性障害への臨床研究で頻繁に用いられている概念には、性別違和を抱く当事者への臨床研究から創出されたジェンダー・アイデンティティ(gender identity)がある。Erikson(1968 岩瀬訳 1973)によれば、“～のアイデンティティ”や“～的アイデンティティ”などの概念は、そのとき自分が研究している測定可能な概念にアイデンティティのある一面をあてはめて自分の研究の独自性を明確にしようとする、“アメリカ的大衆用心理学の愛玩テーマ”に過ぎない。しかしながら、ジェンダー・アイデンティティは、性同一性障害当事者の抱く心理的苦痛を説明する中核的概念の1つであり、安易に切り捨てることはできない。そこで、アイデンティティ研究の観点から性別移行プロセスに着目するためにはまず、ジェンダー・アイデンティティとアイデンティティの異同について検討する必要がある。

ジェンダー・アイデンティティとは

ジェンダー・アイデンティティの操作的定義

ジェンダー・アイデンティティとは一般に、男性あるいは女性としての自己のあり様に対する確信のことを指す。研究論文の中で用いられる

ジェンダー・アイデンティティは、身体的性別と心理的性別の同一性を扱うものと、社会に求められる性役割と個との葛藤を取り扱うものに大別される(伊藤, 2001)。前者は、生物学的性が正常型であるにもかかわらず自分の性別を生物学的性とは反対の性と認識する性転換症(現在の性同一性障害)の子ども達の臨床研究(Stoller, 1964)のなかで用いられたcore gender identity(中核的性同一性)に由来する概念で、自らの性別に関する基本的認識のことを指す(澤田, 2001)。一方後者は、男女のどちらかに規定できない身体的特徴を持って出生した者(インターセックス)の臨床から導き出された概念で、“男性あるいは女性、あるいはそのどちらにも規定されないものとしての個性の統一性、一貫性、持続性(Money, 1985)”を指す。

性同一性障害臨床におけるジェンダー・アイデンティティと心理社会的困難 医学的臨床研究におけるジェンダー・アイデンティティ概念は、性同一性障害への医学的・心理的援助介入とともに発展されていった。現在は、身体的性別に基づかない性別に関する自己の認識(性自認)として用いられ、身体的性別と性自認との間にある不一致が性同一性障害の臨床的特徴として指摘されている(澤田, 2001)。

1960年代まで性同一性障害に対する医学的治療は、精神医学分野に限られており、身体的性別と合致しない性自認を不適切なものとし、それを身体的性別に一致させるための治療が行われてきた(針間, 2010)。最新の見解では、身体的性別を“the other gender (or some alternative gender different from one's assigned gender)(出生時に指定された性別とは反対もしくは異なる新たな性別)”に近づけることを目的に身体的治療を行うことが支持されている(American Psychiatry Association, 2011)。時代によって、その捉え方は異なるが、いずれも、身体的性別と性自認を一致の方向に近づけていく治療と言える(西野, 2011)。

現在までに、医学的介入によって身体的性別移行を実現した性同一性障害当事者を対象にした、身体的治療の実証的効果研究がいくつか報告されている(Udeze, Abdelmawla, Khoosal, &

Terry, 2008)。しかし研究結果は、身体的性別移行が必ずしも当事者の社会的適応やメンタルヘルスの向上に寄与しないことを示唆するものであった。我が国でも、ジェンダー・アイデンティティの高さだけではメンタルヘルスの良好さを正確には予測できない実態が、言及されている(佐々木, 2011)。

その理由として指摘されるのが、社会的偏見や差別等の社会的スティグマである(西野, 2012a, b)。性同一性障害の持つ性別のあり方は、社会に既存の性別二元論では捉え切れない。安定した社会文化的文脈のなかでは、社会的に構築された“望ましいあり方”が社会全体の合意のもとに受け入れられ、ひとつの価値観を形作る(大西, 2002)。一様でない個々の性別のあり方と画一化を求める社会との間に生じる軋轢は、ときに、偏見や差別を生む。身体的性別移行等の外見的变化を伴う身体的治療は、性同一性障害であることを否認なしに他者に察知させるリスクを孕む(日本精神神経学会性同一性障害に関する委員会, 2006)。こうして、身体的性別移行によって心理社会的困難が高められるという事態が生じる(西野, 2011)。

ジェンダー・アイデンティティと

アイデンティティの異同

以上のことからわかるように、性同一性障害で用いられているジェンダー・アイデンティティは、彼らの性別違和を捉える医学的説明概念としての意味合いを強く持っている。性自認と身体的性別の一致(同一性)は、心理社会的発達の観点から用いられているアイデンティティ概念と、その出自からして全く異なる。アイデンティティの獲得が心理社会的安寧の感覚を導くのに対し、身体的性別移行によるジェンダー・アイデンティティの獲得が心理社会的困難を高め得る事実も、この概念的相違によるものと考えられる。

性同一性障害に関する研究の中には、ジェンダー・アイデンティティとアイデンティティを区別するものがある。15名のFemale to Male (FTM)を対象に性別移行を切り口とした半構造化面接を行った西野(2008a, b)によれば、性別移行の前段階において、性同一性障害の中

心的課題は、ジェンダー・アイデンティティの不一致にまつわる。そして、性別移行の初歩としてもっともよく挙げられるカミングアウトにおいて、FTMは社会に既存の価値観（ここでは、性別二元論）に自身を照らし、男女に区分されない奇異で特殊な存在として偏見や差別を受けることに恐れや危惧を抱く。一方で、家族や友人などの他者からの受容を得た者の語る性別移行体験からは、性別を超えた“ありのままの自分としてのアイデンティティ形成プロセス”が見出されている。

性同一性障害の性別移行の中にアイデンティティ形成プロセスを見出した西野(2008a, b)の見解を実証的に検討した研究に、西野(2011)がある。西野(2011)はFTMの性別移行体験の語りから抽出された社会適応形態の変化に関する動的理論として、3期からなる“社会適応再構築プロセス”を提示している。そのプロセスの第3期においてFTMは、個と社会との葛藤を主体的に引き受け、過去から現在、未来へと一貫した“その人なりのよりよい人生のあり方”を獲得する。また、Male to Female (MTF)を対象とした半構造化面接によって得られた主観的な性別移行体験からは、“アイデンティティ再構築プロセス”が抽出されている(西野, 2012a, b)。

FTM及びMTFの主観的な性別移行体験を素材としたこれら一連の質的研究の成果は、性同一性障害の性別移行が、性別二元論という既存の価値体系から抜け出すための闘いとも言えるべき内的・社会的葛藤を伴うことを示唆している。“ありのままの自分でありたい”という実存的渴望は、性別移行によって直面することとなる心理社会的危機を乗り越えるための原動力となり、闘いの中で行われる決断や意志決定は、独自の“自分らしさ”に対する誇りを導く(西野, 2012a, b)。

これらのことから、性同一性障害の性別移行には、後に独自のアイデンティティの形成過程として振り返られる主観的体験と、それを通して得られる生き生きとしたエネルギーの増大が伴うと考えられる。一方、ジェンダー・アイデンティティで説明されるのは、性別違和による心理的苦痛と、必ずしもwell-beingにつながら

ない性自認と身体的性別の一致状態と考えられる。両概念の質的相違は明らかと言えよう。

6. 本質的アイデンティティを

捉えるための今後の研究

概念が拡大解釈されつつあったアイデンティティの問題について改めて述べ直すため、Erikson(1968 岩瀬訳 1973)は、アイデンティティは“獲得”というよりはむしろ、“回復すべきもの”であることを述べた。その例として、熾烈な人種差別をくぐり抜けてきた黒人作家達の陳述を、“放棄されたアイデンティティ”を再獲得するための闘いとして解釈している。Eriksonは彼らの表現活動の中に、“表面的にはあまりにもはっきりと眼にみえるもの、つまり皮膚の色によって特徴づけられた人間としてではなく、むしろ、選択力を持った個人として¹⁾、聞いてほしいし、見てほしいし、また認めてほしい、対面してほしいという、きわめて積極的で強力な要求(Erikson, 1968 岩瀬訳 1973, pp.421)”を見出している。

アイデンティティ概念の時代的変遷に着目した本研究では、Eriksonのアイデンティティ概念に迫ろうとする研究動向を、(a)自己アイデンティティ、(b)心理社会的アイデンティティ、(c)自我アイデンティティの感覚の3つの観点から概観した。その結果、これまでのアイデンティティ研究では、心理的危機に直面した際の主体的な模索と意志決定に基づく、“今も生きている過去の現実性と前途有望な未来の現実性とを連結されるもの”としての、自我アイデンティティの感覚を十分には捉えていないことがわかった。しかし、社会適応や社会復帰に着目した臨床心理学研究の中には、自我アイデンティティの感覚と捉え得る研究報告があった。

さらに本研究では、本質的アイデンティティについて論考を試みている研究報告として、性同一性障害の性別移行に着目した質的研究(西野, 2008a, b, 2011)を取り上げた。Eriksonによって言及されている“これが私だ”という生き生きとした現実感、広く各個人の心理社会的well-beingを捉えるものと考えられる。そのため、性同一性障害の性別移行という社会的現実

から示唆されている本質的アイデンティティは、性同一性障害を有する者を限定的に説明するものではないと予測される。しかし、質的研究によって得られた知見は、より実証性の高い研究による補完作業によって活かされるものであり、その概念的汎用性及び応用可能性について断言するのは、やや時期尚早と言える。

アイデンティティは各個に特有な主観的感觉であり、それ自体を実証的研究の中で取り扱うことは容易ではない。しかし、自我アイデンティティの感觉の構成要素を見出し、それを尺度測定することは不可能ではない。そのためにはまず、性同一性障害の性別移行に見られる現象をアイデンティティの観点から整理し、より包括的・本質的アイデンティティとそれに伴う内的体験の抽出を試みる必要がある。したがって、性同一性障害の性別移行の中にすでに見出されているアイデンティティ再構築に関する研究知見を整理し、その概念的妥当性の検証作業等を通して概念の精緻化を図ることが、直近の研究課題として挙げられよう。

【注記】

- 1) 引用文中に付されている傍点は、Erikson (1968 岩瀬訳 1973) による

【引用文献】

- Archer, S. L. (1993). Identity in relational contexts: A methodological proposal. J. Kroger (Ed.), *Discussions on ego identity*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum, pp.75-99.
- American Psychiatric Association (2000). *Quick reference to the diagnostic criteria from DSM-IV-TR*. Washintom D.C. and London: American Psychiatric Association. (高橋三郎・大野裕・染谷俊幸 (訳) (2003). DSM-IV-TR精神疾患の分類と診断の手引き 医学書院)
- 浅野美知恵・佐藤禮子 (2003). がん手術後2年から3年経過した患者とその家族員の社会復帰過程における自分らしさの回復 順天堂医療短期大学紀要, 14, 13-24.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company. (仁科弥生 (訳) (1977-1980). 幼児期と社会 1, 2 みすず書房)
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle. Psychological Issues Monograph, Vol.1*. New York: International Universities Press. (小此木啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1964). The inner and the Outer Space: Reflections on Womanhood. *The woman in America*, 93, 582-606.
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and Crisis*. New York: W. W. Norton & Company. (岩瀬庸理 (訳) (1973). アイデンティティ—青年期と危機— 金沢文庫)
- Frantz, C. E., & White, K. M. (1985). Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, 53, 224-256.
- Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Cambridge MA: Harvard University Press. (ギリガン, C. 生田久美子・並木美智子 (共訳) 岩男寿美子 (監訳) (1986). もう一つの声—男女の道德観の違いと女性のidentity— 川島書店)
- Halpen, T. L. (1993). A constructive-developmental approach to women's identity formation in early adulthood: A comparison of two developmental theories. *Dissertation Abstracts International*, 55, 1201.
- 針間克己 (2010). DSMに見られる性同一性障害をめぐる議論 榎本稔・安田美弥子 (編) 現代のエスプリ521号 性とところ—男と女のゆくえ— 至文堂 pp.117-123.
- Hodgson, J. W., & Fisher, J. L. (1979). Sex Differences in identity and Intimacy Development in College Youth. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 37-50.
- 伊藤裕子 (2001). 青年期女子の性同一性の発達—自尊感情, 身体満足度との関連から— 教育心理学研究, 49, 458-468.
- Josselson, C. E. (1973). Psychodynamic Aspects of Identity Formation in Collage Women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- Josselson, R. (1994). Identity and relatedness in the life cycle. Bosma, H.A., Graafsma, T. L. G., Grotevant, H. D., & de Levita, D. J. (Eds.) *Identity and development: An interdisciplinary approach*. Tousand Oaks, CA: Sage, pp.81-102.
- 梶田叡一 (1998). 意識としての自己—自己意識研究序説— 金子書房

- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- 村澤和多里 (2005). E. H. エリクソンと P. L. バーガーによるアイデンティティ論の検討—青年期の理解と援助にむけて— 作新学院大学人間文学部紀要, **3**, 1-15.
- 溝上真一 (2002). アイデンティティ概念に必要な同定確認 (identify) の主体行為—実証的アイデンティティ研究の再検討— 梶田叡一 (編) 自己意識研究の現在 ナカニシヤ出版 pp.1-28.
- Money, J. (1985). Gender History, theory and usage of the term in sexology and its relationships to nature / nurture. *Sex and Material Therapy*, **11**, 71-79.
- 永田彰子・岡本裕子 (2005). 重要な他者との関係を通して構築される関係性発達の研究 教育心理学研究, **53**, 331-343.
- 永田彰子・岡本裕子 (2008). 重要な他者との関係を通して構築された関係性様態の特徴—信頼感およびidentityとの関連— 教育心理学研究, **56**, 149-159.
- 日本精神神経学会性同一性障害に関する委員会 (2006). 性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン 第3版 2006年11月18日 (http://www.jspn.or.jp/ktj/ktj_k/pdf_guideline/guideline-no3_2006_11_18.pdf) (2010年12月30日).
- 西野明樹 (2008a). 性同一性障害 (GID) 当事者の語る社会適応のあり方—FTM及びその周辺群への心理的援助に関する一考察— 埼玉大学教育学部学位論文 (未公開).
- 西野明樹 (2008b). 性同一性障害 (GID) 当事者の語る社会適応のあり方—FTM及びその周辺群への心理的援助に関する一考察— GID (性同一性障害) 学会雑誌, **1**, 228.
- 西野明樹 (2011). 性同一性障害を自認する当事者の性別移行のなかにみる社会適応再構築プロセス—FTMへの半構造化面接から— コミュニティ心理学研究, **14**, 166-189.
- 西野明樹 (2012a). 性同一性障害の性別移行の中にみるアイデンティティ再構築プロセスについて—半構造化面接によるMTFカミングアウト体験の聴取から— 日本コミュニティ心理学会第15回大会発表プログラム・発表論文集, 24-25.
- 西野明樹 (2012b). 性同一性障害当事者の性別移行のなかにみるアイデンティティ再構築プロセスについて—半構造化面接によるMTFカミングアウト体験の聴取から— 目白大学大学院心理学研究科修士論文 (未公開).
- 岡本裕子 (1986). 成人期における自我同一性ステータスの発達経路の分析 教育心理学研究, **34**, 352-358.
- 岡本裕子 (1997). 中年からのidentity発達の心理学 ナカニシヤ出版
- 大西晶子 (2002). 異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビュー—文化的identity研究を中心に— 東京大学大学院教育学研究科紀要, **41**, 301-310.
- Puikkinen, J., & Kokko, K. (2000). Identity development in adulthood: A longitudinal study. *Journal of Research in Personality*, **34**, 445-470.
- 佐々木掌子 (2011). 性同一性障害当事者におけるジェンダー・アイデンティティを高めるストレス・コーピングスタイル 心理臨床学研究, **29**, 269-280.
- 佐々木掌子・尾崎幸謙 (2007). ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 パーソナリティ研究, **15**, 251-265.
- 澤田新一郎 (2001). ジェンダー概念の成立 山内俊雄 (編著) 性同一性障害の基礎と臨床 新興医学出版 pp.1-8.
- 清水紀子 (2001). 「しなやかなアイデンティティ」定義に向けての試論—「語り」による, 子の巣立ち体験から— 金城学院大学大学院人間生活学研究科論集, **3**, 53-64.
- 清水紀子 (2008). 中年期のidentity発達研究—identity・ステータス研究の限界と今後の展望— 発達心理学研究, **19**, 305-315.
- 宗田直子・岡本祐子 (2005). アイデンティティの発達をとらえる際の「個」と「関係性」の概念の検討—「個」尺度と「関係性」尺度作成の試み— 青年心理学研究, **17**, 27-42.
- Stoller, R. J. (1964). A contribution to the study of gender identity. *The International Journal of Psycho-analysis*, **45**, 220-226.
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成—関係性の観点からのとらえ直し— 発達心理学研究, **9**, 45-55.
- 谷冬彦 (2001). アイデンティティ・ステータス・パラダイムに対する批判的検討 (I)—基本的問題— 神戸大学発達科学部研究紀要, **9**, 31-39.
- 鏑幹一郎・山本力・宮下一博 (1984). アイデンティティ研究の展望 I ナカニシヤ出版
- 辻本昌弘 (1998). 文化間移動によるエスニック・アイデンティティの変容過程—南米日系移住地

- から日本への移民労働者の事例研究— 社会心理学研究, **14**, 1-11.
- Udeze, B., Abdelmawla, N., Khoosal, D., & Terry, T. (2008). Psychological functions in male-to-female transsexual people before and after surgery. *Sexual and Relationship Therapy*, **23**, 141-145.
- Whitbourne, S. K. (1986). *Adult's development* (2nd ed.). New York: Praeger Publishers.
- 山岸明子 (1991). 大学生の自己認知—「個としての自己」と「関係性の中にある自己」の観点から— 順天堂医療短期大学紀要, **2**, 64-73.

— 2012. 9. 26 受稿, 2012. 11. 24 受理 —

Trends and issues of studies regarding the fundamentals of identity

—Through the viewpoint of gender transition in gender identity disorder—

Aki Nishino Mejiro University, Graduate School of Psychology
Tatsuo Sawazaki Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2013 vol.9

[Abstract]

The identity is one of the main concepts studied in psychology now. Erikson suggested that in order to feel “a vitalizing sense of reality”, the three components of identity (i.e. “self identity”, “psychosocial identity” and “a sense of ego identity”) must be present. However, there is a dearth of studies capturing the essential meanings of identity. The present study reviews the conceptual change of identity starting with the works of E. Erikson and clarifies the results and issues of identity studies. The result showed the knowledge about “a sense of ego identity” is lacking. On the other hand, attempts to describe the acquisition process of “a sense of ego identity” in people with illnesses or social difficulties were found. The results suggested that there is a possibility of enhancing knowledge regarding the fundamentals of identity through studies of people facing psychosocial crisis and fighting for identity reacquisition. Future identity studies may benefit from the gender transition process in gender identity disorder as a theme.

keywords : E. Erikson, identity, gender identity disorder, gender transition